LJ

直前講習

解答

Ｚ会東大進学教室

直前東大国語発展演習

【3 回目】

【問題】

【二】 出典…『春雨物語』「天津處女」 ／ オリジナル問題

ポイント

江戸時代の読本が出典である。このジャンルは、途中さまざまな故事来歴（作者の虚構も含む）を引用しながら話を進めてゆく点に特徴があるが、本文もそういう体裁である。本文の表現・話の展開とも平易な部類に属するが、それだけに注釈などに示されたヒント、文章相互の内容的な関連に注意して読む必要がある。なお、本文は途中数カ所、原典からの省略がある。

現代語訳

良峰の宗貞という、六位の蔵人である（者がいた）が、教養のある者で、帝のお気に召し（帝はお側）近くにたえず呼び寄せて側からはなさず仕えさせ、折に触れて「漢詩を詠め」「歌を詠め」と（宗貞は）御寵愛をたまわっていたので、（帝は彼に）いつの間にか朝政（向きのこと）もひそかに御下問になったということだ。（しかし）宗貞は賢くて、政治（に関することについて）はほんの一言も答え申しあげず、ただ（帝の）御遊興に関わることなど（だけ）を、「そのように行なった先例がございます」などと、（帝の）お気持ちを察して申しあげる。（宗貞は）色好みの男で、華美なことを好んだが、例年の豊明の節会の舞姫の数を（帝に）勧めて増やさせた。「これ〔＝舞姫が踊ること〕は、（後の）清見原の天皇が（即位以前、政争の当事者とする世評から）吉野に世をお避けになった（ので）が、お国をお治めになる運命〔＝即位することになる吉兆〕として、天女が五人天下りして、舞を（もって清見原の天皇を）お慰め申しあげた（というのが）先蹤ですので、五人の乙女（の舞）こそが古い先例です」と申しあげた（のだった）。（帝も）同様に色好みでいらっしゃったので、その年の冬（の豊明の節会）を始めとする宣旨が下って、（豊明の節会を）はなやかに催していらっしゃった。大臣や納言（たち）の御息女は（親の期待から女房たちによって）美しく着飾らせて、（帝の）お目が移りたい〔＝自分の娘が帝の目にとまればよい〕と入念に準備した。（帝が舞を）見ただけでおうち捨てあそばす〔＝見ただけで目をとめない〕場合はどうしたらいいのか。（舞姫は）伊勢や加茂の斎宮の例（と同様）に、年老いるまで（宮中に）留めおかれなさったものだ。

帝は、宗貞が女好きでうかれあるいている〔＝ことあるごとに女に色目を使う〕のを、あばいて（からかって）やろうとして、後涼

殿の端の間の簾のもとに、（女の）衣をかぶってひそんでおられたのを、宗貞は（帝の）御計略とも気付かず、（女物の服の）お袖を引いてみると、お答えもない。（そこで宗貞は相手に向かって）歌を詠んでそっと

山吹の……山吹の花の色の衣の主は誰ですか、と問うても答えない、それは口がないという名の「くちなし色」だからだろう

と申しあげる。（そこで）帝は衣を脱いで（宗貞と顔を）お見合わせになった。（宗貞が）驚き慌てふためいて逃げるのを、（帝は）ただ「（こちらへ）参れ」とお呼び戻しになって（たいそう）御機嫌がよい。（昔）唐土に、桃の実を食いかけた〔＝口をつけた〕のを、「これを召し上がれ。味がとても良い（です）」と（主君に）差しあげたが、（主君は怒るどころかかえってそれを親密さの表現ととらえて）忠誠の者として（ますます）お側近くにまといつかせた〔＝お側近くから離そうとしなかった〕故事（に類すること）であろう。山吹（の色）を口なし色と（いうようになったの）は、この歌をきっかけとしてだそうだ。

帝は嘉祥三年〔＝八五〇年〕に崩御なさって、御陵墓を紀伊の郡の深草の里に築いて、葬り申しあげたことによって、深草の帝と申しあげる（ようになった）のであるそうだ。（その帝の）御葬儀の夜から、宗貞は行方をくらまして逃げてしまった。これは皇太后や大臣（たち）のお憎みをおそれて（のこと）である。殉死ということはその当時（勅によって）おとどめになっていたが、この人〔＝宗貞〕は（まさか）生きているはずがない〔＝殉死したのにちがいない〕と、（世の）人は話し合っていたそうだ。

〔訳注〕○例年の豊明の節会の舞姫の数を……宗貞が勧めて舞姫の数を増減させたという史実はない。帝との親密ぶりを表現しようという作者の虚構。

○「山吹の」の歌……古今和歌集巻十九に素性法師の作として載る歌。宗貞作としたのも作者の虚構。

○唐土に……『韓非子』説難篇の故事。衛の霊公の寵臣弥子瑕（びしか）が果樹園で甘い桃を食い、食いかけの半分を衛公に勧めたのを、衛公は自分を愛するゆえの行為と喜んだが、寵が衰えると、弥子瑕はそのことを理由に退けられた。

解答

(一) イ＝そうした先例ですなどと、宗貞は帝のご機嫌を取って申しあげる。

ウ＝豊明の節会の舞姫の数を増やして華やかに催していらっしゃった。

エ＝娘が帝のお目にとまればよいなあと準備に怠りなかった。

(二) 嫉妬の対象となりやすい、君寵を蒙る身として、高位の者をさしおいて政治に口出しするのは得策ではないと判断したから。

(三) 帝の目にとまることもなかった舞姫が、そのまま年老いるまで籠居しなければならないとは気の毒なことだという感慨。

(四) お気に入りの臣下の宗貞の女好きを利用して、彼に一杯食わせようという戯れがうまくいったことに対する満足感。

(五) 宗貞の歌が人口に膾炙することで、山吹の花の色をくちなし色というようになったということ。

解説

(一) **イ** 語句としては「ためし」「心をとる（取る）」がポイントということになるが、それ以前に「しかせしためし」が、宗貞の帝に対する会話文であることに注意が必要。答案を書く際に、「そうした先例です」などと、述語を《丁寧表現》にすること。「ためし（例）」は、直後の「豊の明りの舞姫」云々の逸話から考えても「先例」「前例」（この文脈で「類例」は不可）。「心をとる」は「相手・対象の心（内面・内容）を理解する」で、「（相手の心中を察して）意向に添うようにする」つまり「機嫌を取る」、「（対象の内容を）理解する・要約する」、「（先行作品の着想を）取り入れる」などの意味。尊敬の接頭語「御」が用いられている点からも、ここは当然「機嫌を取る」である。

ウ 「花さかす」という比喩的表現の内容をどの程度具体化できるかがポイント。傍線部を含む一文冒頭が「同じく色このませしかば」で、傍線部の前提が示されている。帝が宗貞と同様「色好み」であることを前提としての行為が「花さかす」である。したがって、本文「色好む男にて」以下で宗貞が帝に豊明の節会の舞姫の数を増やすことを勧めている点と、傍線部直前で「宣旨くだりて」とある点から、「舞姫の数を増やして節会を行なった」という内容と判断できる。あとは「花さかす」という表現を活かした形で訳文を作ればよい。

エ 「うつらばや」の「ばや」はいうまでもなく《自己の願望》を示す終助詞。「しかまふ」は、サ変動詞「す」連用形に動詞「かまふ」が接続した複合動詞。「す」は、基本的に「意図的に何かを行なう」なので、「しかまふ」で「意図的に・目的を持って準備・用意する」という意味となる。つまり、傍線部直前の「（大臣や納言たちが）御むすめたちつくりみがかせて」から考えれば、

「御目うつらばや」と「しかまふ」とは、「舞姫として演舞する自分の娘に対して帝の目が移る（とまる）ことを狙って怠りなく準備した」と考えることができる。したがって、「御目うつらばや」は直訳では意味が通じない。ただし、出典が擬古文であることに鑑みれば、「御目うつらなむ」とすべきところを誤った破格表現と考えることができ、この解釈なら文脈にはかなう。「帝の目にとまるようであってもらいたい」という内容の願望としてとらえるべきである。

㈡　傍線部直前「さかしくて」の内容が、設問要求である「理由」となる。直前の一文に「御あはれみかうぶりしかば、……朝政もみそかに問ひきき給へる」とあるので、帝が宗貞に政治について訊いたのは、宗貞に対する寵愛のゆえということになるが、その話題を避けるという「さかし」さを考えると、本文末尾近くに、帝の崩御後「太后・大臣の御にくみを恐れて」行方をくらましたという記述があり、さらに本文冒頭で宗貞が「六位」という身分であることも明記されている。以上の点から、宗貞は嫉妬されやすい立場にいる、身分の低い寵臣であったこと、また実際に大臣など高位の者から憎まれていたであろうことがわかる。したがって、「ただでさえ嫉妬されやすい、身分の低い寵臣である自分が、政治について発言すると、ますます高位高官の憎しみを受けることになるという判断」が、ここでいう「さかし」さの内容である。これを、解答欄の大きさを勘案して、長くなりすぎないようにまとめる。

㈢　傍線部「ながめ捨てさせたまふ」は、傍線部直前の大臣・納言たちの行動から、「帝が舞姫を見ただけで興味を示さない」ことと考えられる。また、傍線部直後の「伊勢・加茂のいつきの宮」に施された注釈の内容から考えれば、段落最後の「老いゆくまでこめられはてたまひき」が、「ながめ捨て」られた舞姫の運命を記した部分と判断するのはそれほど難しくない。注意が必要なのは、設問要求が「作者の感慨」の説明であること。傍線部の「いかにせん」が作者の感慨を記した言葉だが、この言葉が「どうしたらよいのか」という意味であることから、「ながめ捨て」られた舞姫の運命に対する作者の「同情」と考えるのが自然で、したがって答案は「同情」「気の毒」などという語でまとめる必要がある。

㈣　傍線部の数行前「みかど、宗貞が色好みてあざれあるくを」以下のエピソードの内容が答案の材料となるのは明らかだが、傍線部直後「もろこしに」云々の作者の表現も見落とさないように。この表現の内容からも、君臣相和した逸話であるという前提で、答案を考えてゆく。普通に読めば、「帝が宗貞の色好みを利用して宗貞をだまそうとした」わけで、帝がかぶった衣が女性の衣であるこ

とはいうまでもなく、またこの企てが何か政治的背景のある深刻なものであるはずもない。単なる「遊び」である。話としては、計略通り宗貞がちょっかいを出して歌を詠みかけ、帝が顔を見せて驚いた宗貞が逃げ出す、という展開だから、帝の企ては成功したことになる。その心情の説明が設問要求なので、「満足感」などの語を用いてまとめるとよい。最低限書くべきポイントとしては「帝が寵臣と戯れている」こと、「寵臣をからかって遊んでいる」こと、「企てが成功して満足している」こと、である。

(五) 傍線部は、古典の物語で典型的な、「命名の由来説明」である。冷静に考えれば、傍線部の説明は矛盾をきたしている。あらかじめ「山吹」―「くちなし」という対応関係がなければ、歌自体が意味を成さない。しかし、古くは『竹取物語』の末尾の「その〔＝不死の薬を山頂で燃やせという〕よしうけたまはりて、つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなん、その山をふじの山とは名づけける」から江戸時代に至るまで、古物語のパロディも含めて語られ続けた話柄であり、作者はそのパターンを踏襲しただけで、論理的な検証など始めから問題にしていないと判断すればよい。パロディや洒落が好きな、江戸時代の俳文・戯作にはよくあることである。傍線部の内容そのものは平易。「山吹の花の色を口なし色というようになったのはこの歌がきっかけ」ぐらいの意味。ただし、これまた注意が必要なのは、単に歌が詠まれただけでは「口なし色というようになった」つまり「口なし色」という呼称が一般化することにはならないという点。設問要求が「説明」なので、歌が詠まれたことと、「一般化」との間をつなぐ記述を要求されていると判断すること。それに気づきさえすれば、「歌が人々の間に知られるようになった」という趣旨の記述を加えることは容易であろう。

【配点の目安】 配点50点 (一) 各6点×3＝18点 (二) 10点 (三) 7点 (四) 9点 (五) 6点

(一)

イ

〈アそうした先例イですなどと、宗貞はウ帝のご機嫌を取ってイ申しあげる〉…6点

※ア2点、イ2点、ウ2点

＊アは、〈しかせしためし〉を「そうした先例（前例）」という意味で訳して可

＊イは、〈しかせしためし〉のあとに「です」「でございます」などの丁寧表現を補ってあれば可
＊ウは〈御心をとりて〉を「帝のご機嫌を取って」などという意味で訳して可

ウ

〈ア豊明の節会の舞姫の数を増やしてイ華やかに催していらっしゃった〉…6点
※ア3点、イ3点
＊アは、「豊明の節会の舞姫の数を増やした」という「華やかに催す」の具体的内容を明示していれば可
＊イは、〈花さかす〉を「華やかに催す」などの意味で訳して可
※全体として「豊明の節会を催す」という内容となっていないものは0点

エ

〈ア娘が帝のお目にとまればよいなあとイ準備に怠りなかった〉…6点
※ア3点、イ3点
＊アは、〈御目うつらばや〉を「帝の目にとまるとよい」という願望の表現として訳して可
＊イは、〈しかまへたりき〉を「心して準備した」「入念に用意した」などと訳して可

(二)

〈ア嫉妬の対象となりやすい、イ君寵を蒙る身として、ウ高位の者をさしおいてエ政治に口出しするのは得策ではないと判断したから〉…10点
※ア2点、イ2点、ウ2点、エ4点
＊アは、「周囲の嫉妬」が明示されていれば可
＊イは、「寵臣である」ことが明示されていれば可
＊ウは、「自分の身分が低い」こと、あるいは「高位の者」の存在への配慮が明示されていれば可
＊エは、「政治への口出しは自分にとって損になると判断した」という内容が明示されていれば可
※エが押さえられていないものは、ほかのポイントが押さえられていても全体で1点

(三)

〈ア帝の目にとまることもなかった舞姫が、イそのまま年老いるまで籠居しなければならないとはウ気の毒なことだという感慨〉…7点

※ア2点、イ2点、ウ3点

＊アは、〈ながめ捨て〉を、帝が舞姫に興味を示さなかったという内容でとらえていれば可

＊イは、〈ながめ捨て〉られた舞姫が、「年を取るまで閉じこめられていた」「独身でいなければならなかった」ことを明示していれば可

＊ウは、舞姫の運命に対する「気の毒」「同情」という、作者の感慨が明示されていれば可

※ウが押さえられていないものは、ほかのポイントが押さえられていても全体で1点

(四)

〈アお気に入りの臣下の宗貞のイ女好きを利用して、ウ彼に一杯食わせようというア戯れがエうまくいったことに対する満足感〉…9点

※ア3点、イ2点、ウ2点、エ2点

＊アは、「寵臣との戯れ」であることが明示されていれば可

＊イは、「色好み」であることを利用した計略であったことを明示していれば可

＊ウは、「戯れ」の内容が「からかう」「一杯食わせる」ものであることを明示していれば可

＊エは、心情を、計略が成功した「満足感」などの語を明示して説明していれば可

※エが押さえられていないものは、ほかのポイントが押さえられていても全体で1点

(五)

〈ア宗貞の歌が人口に膾炙することで、イ山吹の花の色をくちなし色というようになったということ〉…6点

※ア3点、イ3点

＊アは、「宗貞の歌が人々の間に知れ渡る」という前提が明示されていれば可

＊イは、宗貞の歌によって、山吹の花の色を口なし色というようになったということが明示されていれば可

【二】 出典…『蒙求』「陸抗嘗薬」 ／ オリジナル問題

ポイント

東大の漢文では、単に句法の知識を持ち出すだけで解答が得られることは多くない。また、訓点の省略は少ないが、訓点だけに頼るのも落とし穴にはまってしまいがちである。文中の漢字の部首の働きやその字を含む熟語を思い浮かべるなどして漢字本来の意味に注目しつつ、基本的な語順・構文や重要助字の語法を意識する姿勢を忘れないこと、さらには、設問部だけでなく、全体の文脈の中での設問部の位置づけを考えることが肝要である。

書き下し文

陸抗字は幼節、丞相遜の次子なり。呉の将と為る。時に晋の平南将軍羊祜南夏を鎮す。石城以西、尽く晋の有と為り、降る者絶えず。祜増々徳信を修め、以て初附を懐く。呉人悦び服し、羊公と称して名いはず。祜と抗と相ひ対するも、使命交通す。抗祜の徳量を称すらく、「楽毅・諸葛孔明と雖も、過ぐる能はざるなり」と。抗嘗て病み、祜之に薬を遺る。抗之を服して疑心無し。人多く抗を諫む。抗曰く「羊祜 豈に人を酖する者ならんや」と。時に以て華元・子反の復た今に見はると為す。抗毎に其の戍に告げて曰く、「彼は専ら徳を為し、我は専ら暴を為さば、是れ戦はずして自ら服するなり。各々分界を保んぜんのみ、細利を求むる無かれ」と。孫皓聞きて以て抗を詰る。抗曰く、「一鄉一邑すら、信義無くんばあるべからず、況んや大国をや。臣此のごとくせずんば、正に是れ其の徳を彰さん。祜に於ては傷むこと無からん」と。抗大司馬荊州牧に終ふ。

現代語訳

陸抗は、字は幼節といい、（呉の）丞相となった陸遜の次男である。呉の将軍となった。当時、（呉の北方の）晋の平南将軍となった羊祜が、（晋・呉の間にある要地）荊州を鎮定して支配していた。石城から西（の地域）は、ことごとく晋の領有するところとなり、降伏する者が後を絶たなかった。（そこで）羊祜はいっそう恩情ある支配を施し、そ（のいたわり）によって、早々と降伏してきた人々を懐柔していた。（したがって荊州に住む）呉の人々は（羊祜の恩情を）喜んで（羊祜に）服従して、（羊祜のことを）「羊公」と尊称し、（不躾に）名前で呼ぶことはなかった。羊祜と陸抗とは互いに（それぞれの軍の大将として）対峙していたが、使者は行き来させ（て、

礼を失することはなかっ）た。陸抗は羊祜の人徳の厚いことをほめて、「（かつての）楽毅や諸葛亮たちであっても（羊祜の徳を）上回ることはないだろう」と言っていた。陸抗があるとき病を得たところ、羊祜は陸抗に薬を送ってよこした。陸抗は、そ（の薬）をなんの疑いもなく服用した。（陸抗の周囲の）人々はみな（敵方からの薬を信用することはできないと）陸抗に忠告した。（しかし）陸抗は「（あの）羊祜がどうして人に毒を盛ってだまし殺すような人物であろうか（、いやそんなつまらない人物であるはずがない）」と言っ（て平然と薬を呑んだのだっ）た。（それで）当時の人々は（敵対していながら相手を信頼しあった歴史上の将軍たちとして有名な）華元と子反が再来して現れたとほめそやした。陸抗はいつも自軍の兵士たちに次のように告げていた。「羊祜は徳行専一にして（人々をなびかせて）いるのに、こちらは戦争ばかりして（人々を苦しめて）いたならば、実際に戦端を開かない前に自然と（味方の人々も敵方に）服従してしまうことになる。（今後は）それぞれの境界を守（って対陣す）るだけでよいのであって、少しばかりの（土地をとるといった）戦利を得ようとするようなことはしないことだ」と。（すると陸抗の君主である）孫皓は（陸抗が敢えて羊祜と戦おうとしないことを）耳にして、その（不戦の態度の）ことで陸抗を難詰した。陸抗は次のように答えた。「一郷一村（のほんのわずかな地域）でさえも、信実と正義なくしては（人民を服従させることは）なりません。まして大国（を治めようとするの）は、なおさら（信義を尽くさずにはいられないの）です。私めがもしこのとおり（人民を戦争で苦しめることのないように）しないならば、まさしくそれはあの（羊祜の）人徳を明らかにすることになるでしょう。（こちらは戦いの損害を被るばかりなのに対して、）羊祜のほうでは何の損傷もないという結果になるでしょう」と。陸抗は（のちに昇進し、）軍務最高大臣 兼 荊州長官として（一生を）終えたのだった。

解答

(一) 荊州の民衆が、進んで敵将羊祜の支配下に入り、彼を実名で呼び捨てにせず敬称で呼んで、彼の徳を讃えたということ。

(二) 敵方から贈られた薬が毒ではないかと心配したから。

(三) 合戦によって広くもない領域を奪い返そうとすること。

(四) 田舎の小村のような狭い地域でさえも、信実と正義なくしては人民を治められない。まして大国を治めるなら、なおさら信義を尽

くすのは当然だ。

(五) 羊祜　／　《別解》　晋平南将軍

解説

(一) 傍線部前半はさほど難しくないだろう。設問の前には「祜増〻修徳信、以懐初附」とある。「羊祜は人徳で降伏者をなつかせた」と言っているわけだ。したがって、「服」は「懐」に等しく「服従」の意味となる。ただし、「悦」は「よろこぶ」と訓めるが、「説明」としては「進んで」などと言い換えよう。

問題は後半だが、設問部末尾の「不名」に注目する。「名」は名詞になることが多いが、直前の「不」の用法からここでは動詞だと判断される。「名」を動詞で使うとすれば「不名」は「名前を付けない」あるいは「名前を呼ばない」といった意味だろうが、「呉人」が「悦服」した人物はすでに「羊祜」という名があるのだから、「命名」ではない。では「名前を呼ばない」とはどういうことか。そこで「称羊公」に注目すると、「称」には「称讃」という熟語もあるし、また「〜公」は貴人への尊称であることもわかるはずだ。とすれば、「不名」は「実名で呼ぶような無礼なことはしない」といった意味になる。漢文で個人名にあたるものに「名」と「字（あざな）」があることに注意しよう。「名」で呼ぶのは、家族や師匠のようなよほど親しい場合を除けば、相手を見下す態度を示すことになる。

あとは、単なる「訳」にならないように注意。「呉人」はここでは「呉国全体の民衆」とはとれないし、「称」の実際に意味するところも設問部より前から明確である。

採点の着眼点としては、①答案末尾「（羊祜の）人徳を讃えた」ことが明確になっているかどうか、が最大のポイントになる。その他には順に、②主語を「呉の人々」ではなく「荊州の人々」とすること、③「敵将」などの語で呉と晋との敵対関係を明示すること、④「悦服」を「自発的に服従する」の意味に取ること、⑤「称羊公不名」の部分に「敬意」を読みとっていること、以上が答案に表現されていればよい。

(二) 「諫」とは「目上の人物に対して行動・意図の誤りを正すよう忠告すること」の意。設問部より後に「抗曰『羊祜豈酖人者』」とあることに注目。「酖」の意味は注釈にある。「豈」は《反語》の助字だが、《反語》とは《否定》である。これが「諫」に対する返事

なのだから、まわりの人物は「酖」を心配したことになる。設問部の前に「抗称祜徳量」とあるから、陸抗本人は羊祜を信頼していたことがわかるが、なんといっても羊祜は敵将である。したがって彼から「遺」（すなわちここでは「贈」）られた「薬」が実は「毒薬」なのではないかと、陸抗の側近は恐れたわけだ。

採点の着眼点としては、①「薬」が「毒」である可能性に言及していること、②「思ったから」ではなく「心配・不安」あるいは「疑念」の心情を明確にしていること、以上二点を主に見ることになる。なお、設問部の主語と答案の主語は一致するので、主語まで答案に盛り込む必要はないだろう。

㈢ 荊州はもともと呉の領土だったが、石城より西側は敵国晋の将軍に抑えられてしまった。しかし侵掠された土地の民心はすでに敵方になびき、敵将自身も仁者であって、決戦は得策ではない、と、荊州の前線で敵将と対陣している陸抗将軍は判断した。ここで、陸抗の本来の任務・目的は領土回復にあったはずだから、「利」とはその「領土回復」を指すものと考えられる。しかし設問部直前には「各々保分界而已」とあり、「而已」は《限定》の助字だから、「これ以上の侵掠を許さなければ十分だ」と言っていることになる。これに続いて「細利など求めることはないぞ」と部下に言うのだから、「細」は「些細」などの熟語から考えて「小ぜりあいでちまちまと（領土を奪還すること）」の意味であると判断する。「求」は「欲」に近く「～しようとする」といった意味にとってよい。

採点の着眼点としては、①「利」が「失われた領土・土地」を「取り返す」意味であること（、ただし「細」のニュアンスから「領土」はいささかおおげさで、「領域・範囲」といった程度の語でよい）、②「求」を「欲求・意思」の意味に取っていること、③その具体的な手段「暴＝戦い」についての言及が答案前半にあること、以上三点となる。

㈣ 設問部中に「況」の字があり、その前後の「一郷一邑」と「大国」とは対比の関係にあると見ることができる。したがって設問部には《抑揚》の句法が使われていると判断する。この場合、句法に伴う一般的な注意点として、後半部を「（まして～は）なおさらだ」などと片付けずに、「（まして～は）なおさら……だ」と具体的な判断を補ってみせなければならない。

また本問では、「不可無」の《二重否定》にも注目。直接的には「～がないわけにはいかない」と言っているのだが、実際には「どうしても必要だ」と《肯定の強調》になっていることに注意する。ここで「ないわけにはいかない」程度の理解に留まると「一郷一村には信義がないはずがない」との訳文が頭に浮かび、誤って「一郷一村（の人々）にも信義はあるものだ」といった方向に走る危

険性がある。しかしここは、（都にいる）呉の君主からの「なんでさっさと領土を回復せんのか」という詰問非難に対して、現場の将軍の立場から現地の事情を説明している部分である。とすれば「支配・統治」を念頭に置いての発言であることは明らかである。文法・句法的な注意点だけでなく、文脈的な理解もアピールできるかが、本問のポイントとなる。

採点の着眼点としては、①「大国」＝「広大」に対比して「一郷一邑」＝「狭小」であることの表現、②「不可無信義」の部分に「支配・統治」の意味を補充してあること、③「況大国乎」の部分にも「支配・統治」の意味を補充してあること、以上三点を確認する。なお④として、「信義」は現代日本語でもほぼ同じ意味に用いられている語であるが、読解の確かさを示すためには適切に換言することを強く勧めておく。

(五) 設問部直前の「臣不如此」は、与えられた訓点から仮定条件であると判断してよい。否定文が仮定になっているのだから、その中の「此」は「臣」すなわち陸抗が実際に行っていること、すなわち羊祜に対して不戦の態度をとっていることを意味している。「私がもし不戦の態度をとらなければ」とは「実際に戦えば」の意味だから、6行目の「我専為暴」にほぼ等しい。その結果をここでは「正是彰其徳」と言い換えていることになる。

さて「彰」はここでは返り点から動詞であることがわかるが、この語には「顕彰」などの熟語があり、（人名でも「あきら」などと訓むことから、）ここでは「明らかにする」ことだと判断できる。とすれば「『其』の徳を明らかにする」の「其」は「徳ある人物」ということになる。問題文中で人徳を備えた人物と称讃されているのは、「時以為華元・子反復見於今」からすれば「陸抗」と「羊祜」との両名だが、設問部直前の「実際に戦えば」という仮定にしたがえば人民を苦しめることになって「徳」にそぐわないし、そもそも設問部は「陸抗」の発言である。

【配点の目安】 配点50点 (一) 11点 (二) 10点 (三) 10点 (四) 14点 (五) 5点

(一)

〈ア荊州の民衆が、イ進んで敵将羊祜の支配下に入り、エ彼を実名で呼び捨てにせずウ敬称で呼んで、オ彼の徳を讃えたということ〉 …11点

※ア2点、イ2点、ウ2点、エ2点、オ3点

＊アは、〈呉人〉を「荊州に住む呉の国の人々が」と限定した上で、主語としていれば可

＊イは、〈悦服〉の対象を「敵将である羊祜」と補った上で、「進んで支配下に入る」と押さえれば可

＊ウは〈称二羊公一〉を「羊祜を敬称で呼ぶ」と押さえれば可

＊エは、〈不レ名〉を「羊祜を実名で呼ばない」と押さえれば可

＊オは、〈称二羊公一不レ名〉の意味するところを「羊祜の徳を讃える」と押さえれば可

(二)

〈ア敵方から贈られた薬がイ毒ではないかとウ心配したから〉…10点

※ア3点、イ4点、ウ3点

＊アは、「敵から贈られた薬」と押さえれば可

＊イは、アが「毒である可能性」を押さえれば可

＊ウは、ア・イへの「心配・危惧」を押さえれば可

(三)

〈ア合戦によってイ広くもない領域を奪い返ウそうとすること〉…10点

※ア3点、イ4点、ウ3点

＊アは、〈求二細利一〉の手段として「合戦の必要性」を押さえれば可

＊イは、〈細利〉が「狭い領域の奪還」であることを押さえれば可

＊ウは、〈求〉を「欲求・意思」と押さえれば可

(四)

〈ア田舎の小村のような狭い地域でさえも、イ信実と正義なくしては人民を治められない。ウまして大国を治めるなら、なおさら信義

を尽くすのは当然だ〉…14点

※ア4点、イ6点、ウ4点

＊アは、〈一郷一邑〉を〈大国〉との対比で「田舎の小村のような狭い地域」と訳していれば可

＊イは、①〈信義〉を「信実と正義」、②〈不」可」無〉を「なくてはならない・絶対必要だ」と訳し、③「人民を治める」という目的を補っていれば可

＊ウは、①〈況…乎〉を「～さえ―である。まして…はなおさら―だ」と訳し、②〈大国〉を「なおさら―だ」の内容を補って「大国を治めるために信義を尽くす必要がある」と訳していれば可

LJ
直前東大国語発展演習
【3 回目】

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製